ただいま活動中

子どもの宝物「治療」お任せ

ひたちおもちゃの病院（日立市）

「ボタンを押しても音が出なくなってしまった」。1月15日の午後、日立市会瀬町の福祉プラザに、壊れたおもちゃが持ち込まれた。9人いた「ドクター」の1人が早速、工具を手に「診察」を始める。ひたちおもちゃの病院が同プラザを間借りする形で、「診療所」を開設していたのだ。

認定こども園で働く女性が持ち込んだのは、手押しで遊ぶ新幹線のおもちゃだ。その場で分解して原因を探った結果、内部で断線していることが分かり、はんだごてで修理し、再び組み直してボタンを押すと警笛音が響いた。女性は「直らなければ捨ててしまうところだった。子どもたちも喜ぶ」と満足げだ。

時間内に修理できない場合は「入院」となる。この日、昨年11月に入院していた犬のおもちゃを、引き取りに来た母親に手渡すことができた。男性メンバー(85)が自宅に持ち帰り、割れていた脚のパーツを手近なプラスチック板で自作して修理した。「直ったおもちゃを渡す時、子どもたちもみんないい顔をしてくれるのがやりがいの一つ」と男性は語る。

工具を使って持ち込まれたおもちゃを修理するメンバーたち

ひたちおもちゃの病院は2003年に設立された。初代院長の小林勇作さん（故人）が、ボランティアでおもちゃを修理する日本おもちゃ病院協会（東京都）の活動を知り、定年退職後のシニアが集まる地元の市民活動団体から有志を募ったのが始まりだ。

当初は修理依頼が少なかったが、市のイベントへの出張などで活動が知られるようになった。17年は177件の依頼が寄せられ、「完治率」は93%。現在は市内6か所で月1度ずつ診療所を開く。メンバーも増え、地元の日立製作所OBなど70、80歳代の19人が活動中で、市外からの参加者もいる。

2代目院長を務める山本三男さん(76)も日立製作所OBだ。退職後、家にいるのに退屈していたところで活動を知ったという。これまでおもちゃの修理経験はなかったが、メンバー間で情報交換して日々技術を向上させている。「直せると達成感を味わえるし、少しは社会貢献ができているのかなと思う」と笑顔を見せた。

（山波愛）

リサイクル意識 育む

ひたちおもちゃの病院で活動する主なメンバーたち

日本おもちゃ病院協会は1996年に全国的に組織化されたボランティア団体。壊れたおもちゃを原則無料で直すことで、愛用する子どもたちに喜んでもらうほか、物を大切にするリサイクル意識の定着を目指す。

1月現在、45都道府県各地におもちゃ病院が開設され、会員数は約1400人に及ぶ。県内では、取手、筑西市など県南、県西地域を中心に11市町で活動中だ。

同協会では修理方法を指導する「ドクター」の養成講座を開くほか、協会ホームページでおもちゃ修理の手順を紹介している。